

42172

教科書文庫

4
815
42-1923
20000 39767

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

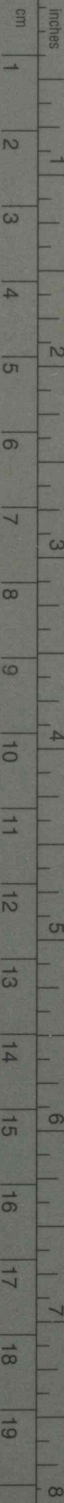


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

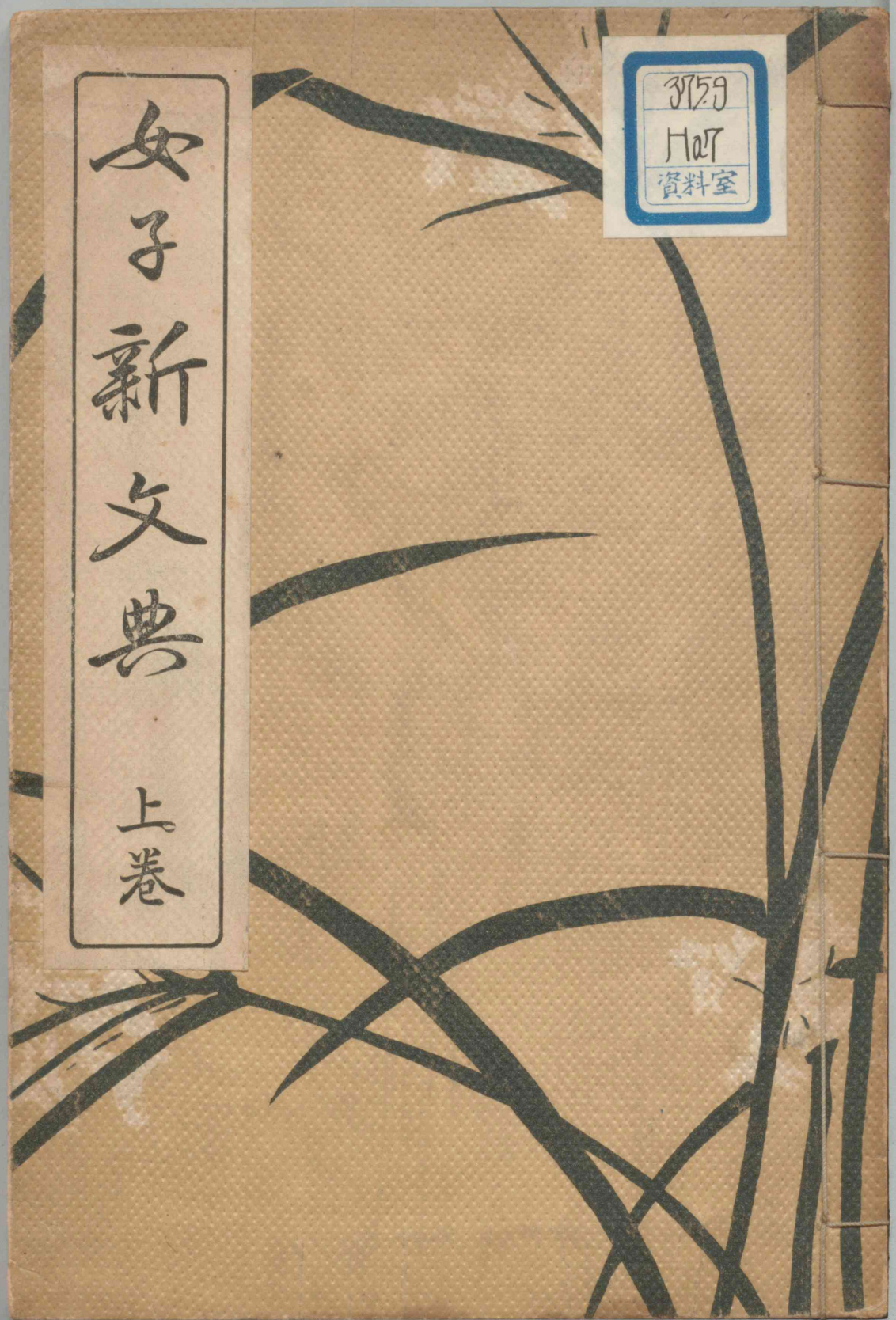
© Kodak, 2007 TM: Kodak



3159  
H27  
資料室

女子新文典

上卷



375.9  
Ha7

資料室

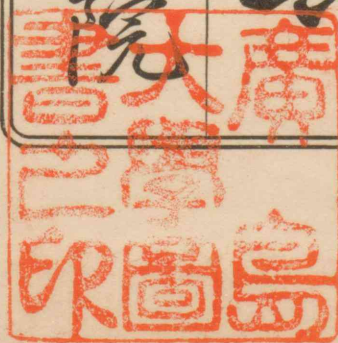
大正二十一年一月二十四日  
文部省檢定濟  
高等女學校國語教科用科

文學博士芳賀矢一著

女子新文典

東京

合資會社育英書院



女子新文典緒言

教員諸君に申す

一、大正元年九月始めて「新定女子文典」を刊行してから、同四年及び七年の二回に訂正版を出した。今回は第三回目の修正で、全文を口語文に書直したし、練習問題等の變更も多いので、「女子新文典」といふ新しい名を附けた。

二、本書が明治四十四年七月の文部省訓令高等女學校及び實科高等女學校教授要目に準據して、現代文に通有な法則を説明するのを主眼としたことは今更にいふまでもな

緒言

一

い。幸に全國多數の學校に採用せられてゐるので、教師諸君から種々の注意を寄せられ、それによつて修正を加へ得た點の多いのは非常な仕合である。

三、分類名稱の繁冗なことを避け、成るべく簡単に平易に習得させようとしたのが、本書の特色の一つである。

四、動詞の活用形を諳記させるが如きも、骨折損のくたびれ儲といふやうな場合が多い。之を最も簡単な方法で記憶させるやうに注意したのが第十四章の説明で、これも本書の一特色である。

五、動詞の自他を分ち、客語、補語の別を立てるのも無用の事で、國語の性質から考へて、之を簡單にしてあるのも本書の特色である。

六、今回の修正で、第三編の文・主・に關する一章を省いた。これは單純な議論に陥るのみでなく、この議論にも多少疑をもつやうになつたからである。

七、第四篇には正誤篇を置いて、假名遣以下主要の誤謬に就いて説明した。從來學習した所を復習させると共に、應用の知識を得させる爲である。

八、動詞用。ふは上一段活用とするのが學説に於ては正しいのである。けれども國定讀本にすべては行上二段と定められたので、本書は之に従つて居る。

九、實科高等女學校教科書として本書を使用せられる諸君は、第三篇の文章篇を省いて、第四篇を適宜取捨して授けられたらよからうと思ふ。

大正十一年九月二十日

編述者 しるす

# 女子新文典 上巻 目次

## 第一篇 詞の種類

第一章	名詞	練習一	一
第二章	代名詞	練習二	三
第三章	數詞	練習三	四
第四章	形容詞	練習四	五
第五章	動詞	練習五	六
第六章	副詞	練習六	七
			八
			九
			一〇
			一一
			一二
			一三

第七章 助動詞……………一五  
 練習七……………一五  
 第八章 助詞……………一八  
 練習八……………一八  
 第九章 接續詞……………二一  
 練習九……………二〇  
 第十章 感動詞……………二三  
 練習一〇……………二三  
 第十一章 十品詞……………二四  
 練習一一……………二七

第二篇 語の活用

第十一章 動詞の活用……………二九  
 其の一、五十音の行の四段にわたつて活用するもの……………二九  
 練習一二……………三五

其の二、五十音の行の二段にわたつて活用するもの……………三六  
 練習一三……………三九  
 其の三、五十音の行の一段にのみ活用するもの……………三九  
 其の四、五十音の行の三段にわたつて活用するもの……………四一  
 練習一四……………四四  
 第十三章 形容詞の活用……………四五  
 練習一五、一六、一七……………四九  
 第十四章 動詞の活用形……………五〇  
 其の一、終止形と連體形……………五〇  
 練習一八……………五二  
 其の二、未然形と已然形……………五二  
 練習一九……………五四  
 其の三、連用形……………五四  
 其の四、命令形……………五六  
 第十五章 形容詞の活用形……………五七

第十六章 助動詞の活用……………五八

第十七章 用言と助動詞との連結……………五九

其の一、時のあらはし方……………五九

其の二、推量義務等のあらはし方……………六〇

其の三、打消のあらはし方……………六二

其の四、使役受身等のあらはし方……………六二

其の五、敬語のあらはし方……………六三

其の六、其の他の助動詞……………六五

練習二〇……………六八

練習二一……………六八



# 女子新文典 上巻

文學博士 芳賀矢一 著

## 第一篇 詞の種類

品詞分別の標準は、文語でも、口語でも、變はない。

### 第一章 名詞

- 一 東京、大阪、横濱、ロンドン、日本、印度、歐羅巴
- 二 富士山、楊子江などは地の名である。
- 三 紀貫之、紫式部、清少納言、奥村五百子、ナイチン

ゲールなどは人の名である。

〔三〕熊、牛、馬、狐等は獣の名、梅、櫻、松、杉等は木

の名、単衣、袷、綿入、被布等は着物の名、鍋、釜、

樽、杓子等は道具の名である。

〔四〕手、足、腹、背は身體の一部分の名、根、葉、枝、

幹等は植物の一部分の名、衿、裾、袖、袂等は着物の

一部分の名、底、蓋、柄、呑口等は道具の一部分の名

である。

〔五〕上、下、縦、横、東、西、南、北などは位置又は方

角をあらはす名である。

〔六〕春、夏、秋、冬、心、夢、命などは形の無いものに

附けた名である。

〔七〕里、町、間、尺、寸、貫、匁、圓、錢、厘などは度

量をあらはす爲の名である。

〔八〕白、黒、赤、青等は色の名、長さ、厚み、太さ、美

しさ等は分量、形状、性質をあらはす名である。

〔九〕操、儉約、慈善等は事柄の名である。

すべて物事の名として用ひる語を名詞といふ。

練習一

左の文から名詞を見出せ。

- 一 西洋人は日本は子供の樂園であると言つてゐる。(口)
- 二 柔よく剛を制す。
- 三 舌は禍の根。

- 四 あつささむさも彼岸まで。
- 五 乃木大將夫人静子は鹿兒島藩士湯地定之の女なり。
- 六 吉野山霞の奥は知らねども見ゆる限は櫻なりけり。
- 七 春は來れり。山の櫻は咲き、野の草は萌ゆ。遠山の雪はまだ消えざれども、小川のさゝやきは、鳥の聲とともにのどかなり。

### 第二章 代名詞

〔一〇〕私、自分、わらは等は自分の名に代へて用ひる語である。

〔一一〕あなた、君、彼、先生、閣下等は他人の名に代へて用ひる語である。

〔一二〕これ、それなどは物を指して、その物の名の代に用ひる語、ここ、そこなどは場所を指して、その場所の名に

代へて用ひる語である。

〔一三〕こち、そちなどは方角を指していふ語である。

〔一四〕誰、いづれ、いづこ、いづち等は人、物、場所、方

角の確かにそれと定まらぬものを指していふ語である。

〔注意〕この、その、わが、たがなど使ふ場合には、こ、そ、わ、たが代名詞である。

すべて物事の名に代へて用ひる語を代名詞といふ。

#### 練習二

〔一三〕〔一四〕の代名詞に對する口語の代名詞を擧げよ。

#### 練習三

左の文から代名詞を見出せ。



- 一 鶯の聲こなたかなたに聞ゆ。
- 二 この花はその色の美しいばかりでなく、その香が非常に高い。(口)
- 三 我が身一つの秋にはあらねど。
- 四 いづこも同じ秋の夕暮。
- 五 かしここゝにて摘めるわらびは、二つの籠に満てり。
- 六 爾等克ク朕カ意ヲ體シ、朕カ事ヲ獎順セヨ。

### 第三章 數詞

〔五〕 一。つ、二。つ、三。つ、四。つ、五。つ、一、二、三、四、

五などは物事を數へる語である。

〔六〕 一。つ。目、二。つ。目、三。つ。目、第一、第二、第三、第一號、第二號、第三號、第一番、第二番、第三番などは物事の順序を數へる語である。

〔七〕 猫一匹、鶏二羽、鯛五尾、長持六棹、鏡三面、帶二筋などの匹、羽、尾、棹、面、筋は唯數へる爲に加へた語である。又屏風一双、靴足袋一ダースのごとく、以上の數を一纏にしてあらはす語もある。

〔八〕 いくつ、若干、幾何、數多なども亦數をあらはす語である。

物事の數又は數の順序をあらはす語を數詞といふ。

#### 練習四

左の文から數詞を見出せ。

- 一 一に看病、二に藥。
- 二 私には三人の男子があり、戦死したのはその第二子です。(口)

- 三 百里を行くものは九十里を半ばとす。
- 四 一反の紋付は少くとも七軒の染物屋の手を要するなり。
- 五 月の直径は地球の直径の四分の一よりも少しく短し。
- 六 在位二十五年、四十八歳にして位を皇太子に譲り給ふ。
- 七 漢字の總數は三萬に餘り、その中普通に用ふるもの四千あり。
- 八 大阪名物の橋の數は大小合せて四百八十八、八百八橋の稱に反かす。

### 第四章 形容詞

〔二五〕 長し、短し、太し、細し、重し、輕し、高し、低し。などは名詞の上又は下について、その物事の分量を形容する語である。

例、長き絲(文) 長い絲(口)

絲長し(文) 絲が長い(口)

細き針(文) 細い針(口)

針細し(文) 針が細い(口)

〔三〇〕 赤し、黒し、青し、白しなどは物事の色合を形容する語である。

〔三一〕 汚し、美し、貴し、賤し、などは物事の性質を形容する語である。

名詞の上又は下についてその物事を形容するに用ひる語を形容詞といふ。

### 練習五

左の文から形容詞を見出せ。

- 一 父母の思は山よりも高く、海よりも深し。
- 二 良薬は口に苦し。
- 三 ゆんでの山の傾斜面には、白樺が白い幹を見せてゐる。(口)
- 四 その罪死すとも贖ひ難し。如何にせばよろしからん。
- 五 空よく晴れて暑き日なり。
- 六 夜雲收り盡して月の行くこと遅し。
- 七 今回の大戦争に際しての、各國婦人の活動ぶりは真にめざましいものがあつた。(口)
- 八 あるじなしとて春を忘るな。
- 九 天に二日なく、地に二王なし。
- 一〇 身分の卑しきを恥づる勿れ、心の醜きを恥ぢよ。

### 第五章 動詞

- 〔三〕 握る、つかむ、拾ふなどは手のはたらき、踏む、つみ踏む、つみ踏む、走る等は足のはたらきをあらはす語である。
  - 〔三〕 ならむ、聞く、か鼻ぐ、話すなどは目や耳や鼻や口のはたらきをあらはす語である。
  - 〔三〕 思ふ、悲しむ、喜ぶなどは心のはたらきをあらはす語である。
  - 〔三〕 降る、咲く、吹く、散るなどは自然のはたらきをあらはす語である。
  - 〔三〕 浮ぶ、傾く、動くなどは物事のはたらきをあらはす語である。
- 一切のはたらきをあらはす語を動詞といふ。

練習六

左の文から動詞を見出せ。

- 一 花笑ひ、鳥歌ふ。
- 二 蠶は絲を吐き、蜂は蜜を醸す。
- 三 祝へ、祝へ、今日のよき日を。
- 四 家貧しうして、良妻をおもふ。
- 五 齒落ち、目かすみ、耳鳴る。
- 六 學ヲ修メ業ヲ習ヒ、以テ智能ヲ啓發シ、徳器ヲ成就ス
- 七 姉は機を織り、妹は絲を紡ぐ。
- 八 幹事は會長の指揮を受けて、庶務を整理す。
- 九 遠帆の歸る處、水は雲に連る。
- 一〇 檜林の中から二三頭の牛が水邊まで出て來る、子牛もその後から現れて來て、水邊を狂ひまはる。(口)
- 一一 春の風の吹く所、そこに淡雪消えて若草萌え、谷川の氷とけて波

の花まづ咲く。枯木活きて芽をふき、燒痕蘇りて、蕨の優しき拳、空をつかまんとす。

第六章 副詞

〔モ〕

(1) 路狭し

(1) (2) 路稍狭し

(3) 路甚だ狭し

(1) 富士山を望む

(□) (2) 近く富士山を望む

(3) 遙に富士山を望む

(イ) の例では稍、甚だは下の形容詞狭しに副うて、その狭さの度を一層明白にしてゐる。(□) の例では近く、遙には下の動詞の望むに副うて、望む場所の遠近を更によく定めて居る。

〔エ〕

今、しばし、曾て、既になどは動詞又は形容詞に副

うて、時間を限り定める語である。  
 〔元〕ここに、どこになどは動詞又は形容詞に副うて、その場所を限り定める語である。  
 〔言〕僅に、殆ど、甚だ、全く、大いになどは動詞又は形容詞に副うて、その分量、度合を限り定めるのである。  
 〔三〕必ず、豈、決して、いづくんぞ、恐らくは、願はくはなどは動詞又は形容詞に副うて、断定、推量、願望等種々の意味をあらはすものである。  
 〔三〕いと静かに聴く「最も忠實に勤む」の場合に、いと静かに副うて更に之を限定し、最もは忠實に副うて更に之を限定して居る。

動詞形容詞に副うてその意味を限定する語を副詞といふ。副詞は又副詞に副ふことがある。〔三二〕の場合は即ちそれである。

### 練習七

左の文から副詞を見出せ。

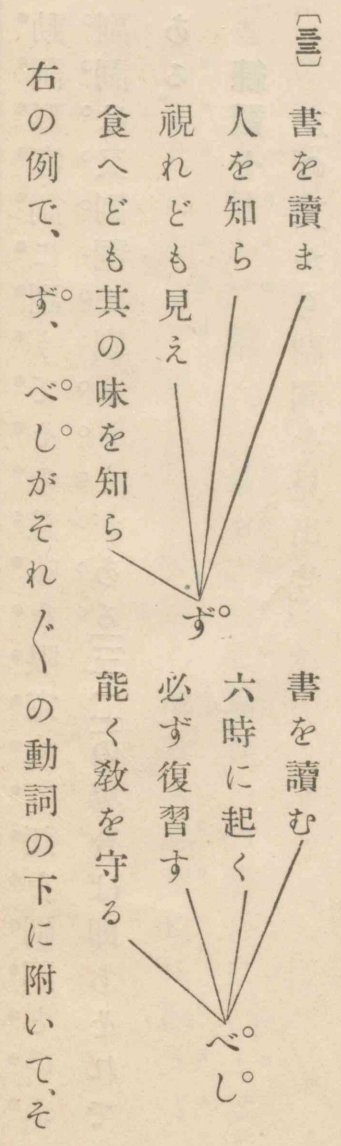
- 一 夫婦相和シ、朋友相信ズ。
- 二 東の空や、明けゆく。
- 三 ゆる／＼拜見致すべく候。
- 四 常に其の心を正直にせよ。
- 五 物盛なれば必ず衰ふ。
- 六 空は一面にくもる、風いよ／＼つめたし。
- 七 互に善を責むるは朋友の道なり。
- 八 地獄のさまもかくやと覺えて、身はさながら、劔の山とやらんに

さまよひぬる心地す。

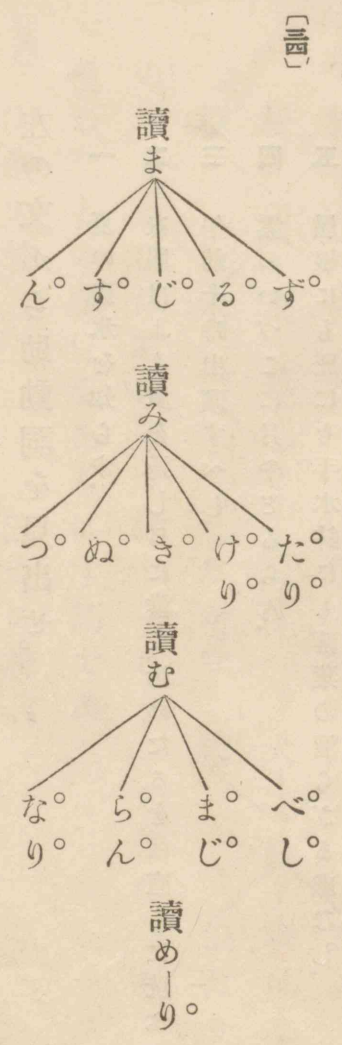
九 せつかく訪問して来て、直に歸るのをいやがる人もある。(口)

一〇 恐らく、このたそがれ時は暮れさうで暮れない町の空氣の紫色と共に、もつとく長くつづくやうになるでせう。そして極短かつた冬の日と、ちやうど反對に、一晝夜の大部を書のやうに明るくしてしまふでせう。(口)

### 第七章 助動詞



のはたらきを助けることがわかる。これ等は獨立しては用ひぬ語で、いつも動詞の下に附屬してあらはれるものである。



これ等もみな動詞の下に附いて、そのはたらきを助ける語である。

動詞の下に附いて其のはたらきを助ける語を助動詞とい

ふ。

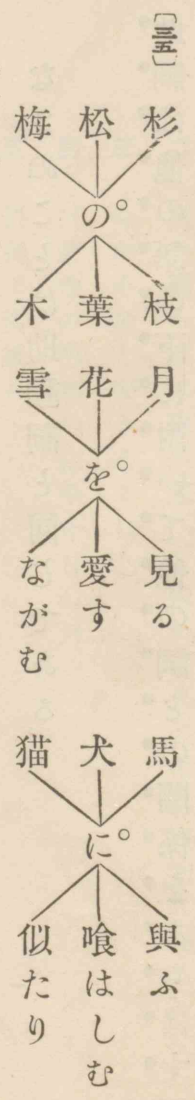
〔注意〕 助動詞は他の助動詞の下にも附いて、いくつもかさなつて用ひられる。(例、讀まざるべきなり)

練習八

左の文から助動詞を見出せ。

- 一 夏の蟲氷を知らず。
- 二 衣服はよく風を通し、日に當て、汚れたるをば直ちに洗ふべし。
- 三 午前十時出頭すべし。
- 四 雲のいづこに月やどるらん。
- 五 屋根にも庇にも手水鉢にも落葉の溜らざる處なし。
- 六 今年も半ばは過ぎにけり。
- 七 言ふまじと思へど今日のおつさかな。
- 八 おのが身を修むる道は學ばなん、賤がなりはひ暇なくとも。

第八章 助詞



の、を、には右に示す通り、それらの語の下について、他の語との關係をあらはす語である。

- 〔美〕 (1) 樹の枝 三つの柿
- (2) 我が家 君が代
- (3) 三と二とを合すれば五となる
- (4) 書を讀む 文を作る
- (5) 先生に贈る 六時に起く

(6) 西京へ行く 諸方へ通知す  
 (7) 西京より歸る 山より高し  
 (8) 九時まで勉強す 青森まで行く  
 (9) 人が鬼か 言ふか言はぬか  
 (10) 豈圖らんや 誰か之を信ぜんや

これ等は皆語の下に附いて、他の語との關係をあらはすもので、大抵は口語も文語も同じである。獨立して用をなさぬことは助動詞と同じである。

助詞は他の語の下に附いて他の詞との關係をあらはす詞である。  
 か、り、に、も、と、い、か、る、の、ち

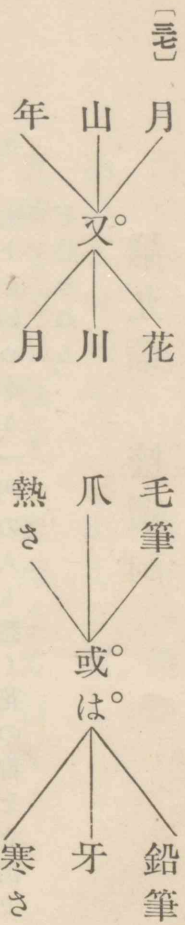
練習九

左の文から助詞を見出せ。

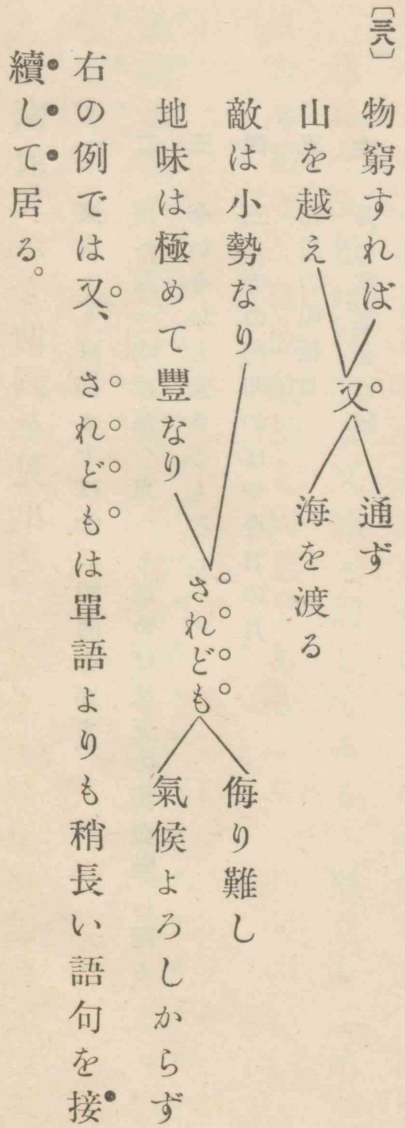
- 一 東京より京都までは十二時間を要す。
- 二 西へ西へ、或は東へ東へと進めば、又元の出發點に歸る。
- 三 今か今かと安き心もなし。
- 四 三井寺の門叩かばや今日の月。
- 五 紺屋の明後日。
- 六 月に叢雲、花に風。
- 七 君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで。
- 八 人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ひぬるかな。
- 九 主上を始め奉り、一門の人も悉く花の都を立出で、西海の浦にぞ赴きぬる。

第九章 接續詞





右のやうに又、或はは語と語とを接續する役目をして居る。



上下の語句を接續する役目をつとめる語を接續詞といふ。  
 〔又〕 見ると聞くとは大なる相違なり

敵は小勢なれども侮り難し

右のと、どもなども、語句を接續する役目をしてをる。けれどもこれ等は便宜上助詞として取扱ふのである。

練習一〇

左の文から接續詞を見出せ。

- 一 生徒及び保證人控所。
- 二 何人も入場を許す。但し六歳以下は此の限にあらず。
- 三 歌文にも長せり。されども其の最もよくせるは繪畫なりき。
- 四 徒歩にて行くか、或は馬にて行くべし。

第十章 感動詞

〔四〇〕 あなかしこ

あはれ。去年の今日は

嗚呼。忠臣楠子之墓

右の例のあな、あはれ、嗚呼などは感動した時に不意に

發する語である。これ等の類を感動詞といふ。

〔四一〕 うれしきかな。 樂しきかも。

右の例のかな、かもなども感動の意をあらはす語である。

然し、これ等は便宜上助詞として取扱ふのである。

### 第十一章 十品詞

〔四二〕 これまでに學んだ詞の種類は名詞、代名詞、數詞、

形容詞、動詞、副詞、助動詞、助詞、接續詞、感動詞で、

これを十品詞といふ。

〔四三〕 十品詞の中、最初の三つを總稱して體言といひ、次の二つを總稱して用言といふ。即ち次の通りである。

名詞 | 物事の名をあらはす語

代名詞 | 物事の名に代りて用ひる語 | 物事の本體をあらはす語 | 體言

數詞 | 物事の數をあらはす語

形容詞 | 物事の性質形狀等をあらはす語 | 物事的作用をあらはす語 | 用言

動詞 | 主として物事はたらきをあらはす語 | 用言

あらはす語

〔四四〕 十品詞の中、助動詞、助詞の二つは單獨では意義をなさず、必ず他の語に附屬して用ひる。

〔四五〕 第三四節を見よ。讀むの動詞は種々の助動詞に連る

にあたって讀ま、讀み、讀む、讀めと幾度も其の形を變へた。一つの語のかく形を變化するのを語の活用といふ。十品詞の中、動詞、形容詞、助動詞の三つには活用があり、其の他の七品詞には活用がない。即ち次の通りである。

助動詞	感動詞	接續詞	副詞	數詞	代名詞	名詞	動詞
			活用しない語				
							活用する語
							助動詞

練習一一

左の文に就いて、附線した語の品詞の名を言へ。

一、天明卯年の凶作に、奥州の津輕、南部、饑饉最も甚だしかりければ、足腰の立つものは皆四方に走りて食物を求めけり。出羽の秋田は隣國の事なれば、饑人の來ること數萬人。然るに秋田の地も亦凶作の事として救助すること能はず、其の饑人又あふれて鶴岡に來りぬ。されば鶴岡の路頭は饑人にておし合ひ、へし合ひきとかや。さて食を得ざるものは、忽ち其の地にて餓死するによりて、鶴岡の人々は各身上の限り、力を盡して救ひけり。

二、知るも知らぬも知りあうて、語る間もなく向ふ岸、おもひくにおり立ちて、西へ東へ別れゆく行くを送れば、又來る、相手は日々に變れども、かはらぬ流、同じ主岸の青柳水の月波間の馬もなじみにて、春秋いくつ重ぬらん。

三、昨日までこがねの雲と見し銀杏も、今朝は膚薄う骨あらはれ、晩春の黄蝶にも似たる残葉の猶此處彼處にすがりつきたるも哀れなり。

第二篇 語の活用

第十二章 動詞の活用

〔興〕

犬鳴か<sup>ず</sup>

犬吠え<sup>ず</sup>

犬鳴き<sup>たり</sup>

犬吠え<sup>たり</sup>

犬鳴く<sup>べし</sup>

犬吠ゆ<sup>べし</sup>

犬鳴け<sup>ども</sup>

犬吠ゆ<sup>れども</sup>

鳴く、吠ゆの二つの動詞が助動詞、助詞の上に連る場合を見るに、右のやうに異なつてをる。これで、動詞の活用が一種のみでない事がわかる。

其の一 五十音の行の四段にわたつて

活用するもの

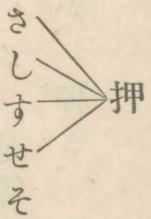
〔四〕



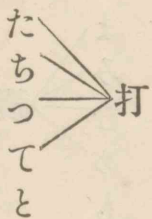
鳴く。の動詞は右のやうに五十音のカ行の四段にわたつて活用して居る。同一の方法で書くを檢せよ。



カ行の四段にわたつて活用する。説く、巻くも同様である。次に押すは如何。



サ行の四段に活用する。落す、ひたすも亦同様である。次に打つは如何。

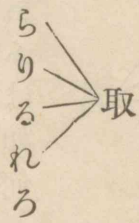


タ行の四段に活用する。勝つ、持つも同じである。次に言ふは如何。

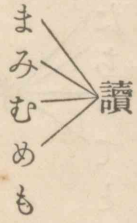


問ふ、學ぶを檢せよ。

次に取る。は如何。



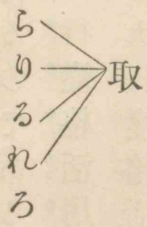
次に読む。は如何。



賣る。刈る。は如何。

マ行の四段に活用する。編む。飲むなども同様である。  
 「見」かく五十音の行の四段に活用するものを四段活用  
 動詞といふ。是等はア段の音の處から打消のずに連る。  
 即ち書か、押さ、打た、言は、讀ま、取ら等の活用形か  
 らする。

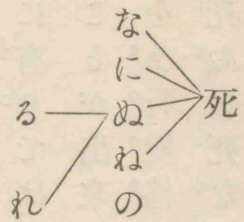
「見」有りは打消を作る時も有らずとなり、活用する形を見  
 ても、同じくラ行の四段に活用してゐる。



けれども取る。の場合。は取り。では言切ることが出来ない  
 のに、有り。では「こゝに花あり」のやうに、あり。といつて言切  
 ることが出来る。唯この點が違ふのである。  
 有りをラ行變格活用の動詞といふ。

「善」死ぬ。は死なずと、ア列の音より打消を作ること、四段活  
 用に同じである。な、ぬ、に、ぬ、ねの四段に活用するの  
 も相似てゐる。然し「死ぬる人」死ぬる。れどもとも活用し

て、活用の形は四段活用よりも尙二つ多い。  
死 な に ぬ ぬる ぬれ ね



ぬの段に更にする、れを添へてぬる、ぬれの二つの活用形を得るのである。

死ぬをナ行變格活用の動詞といふ。

〔注意〕 ナ行變格活用には、此の外に往ぬといふ動詞がある。今の文には用ひることが少い。

〔五〕 以上學んだ所を概括していふと、五十音の行の四段に

わたつて活用するものに三種ある。

- (一) 四段活用
  - (二) ラ行變格活用 (有り)
  - (三) ナ行變格活用 (死ぬ)
- 五十音の行の四段に  
わたつて活用する。

〔注意〕一、四段活用は文語も口語も同じである。ラ行變格、ナ行變格は口語では、全く四段活用と同じくなった。  
〔注意〕二、ありは存在を示す。動詞には存在を示すものもあるのである。

練習一二

左の動詞を活用せよ。

- たのむ 突く 濁る 乗る 拂ふ
- 走る 通る 通ふ 縫ふ

〔五〕

其の二 五十音の行の二段にわたつて  
活用するもの

起きず

受けず

(イ) 起くべし

(ロ) 受くべし

起くるなり

受くるなり

起くれども

受くれども

右の二つを比較せよ。

起

かきくけこ

るれ

受

かきくけこ

るれ

打消に連る時、(イ)はイ段の處から、(ロ)はエ段の處からする  
差別がある。即ち

(イ) はイ、ウの二段に活用し、更に其のウ段の音に<sup>る</sup>。

を添へて活用する。

(ロ) はウ、エの二段に活用し、更に其のウ段の音に<sup>る</sup>。

を添へて活用する。

〔五〕

前と同じ方法で過<sup>ぐ</sup>、落<sup>つ</sup>、悔<sup>ゆ</sup>等の活用を檢せよ。

過

がぎぐげご

るれ

落

たちつてと

るれ

悔

やいゆえよ

るれ

かくの如くイ、ウ二段に活用する動詞を、上二段活用の動詞



といふ。

尙左の動詞を検せよ。

老ゆ 恨む 強ふ

〔善〕

前と同じ方法でとゞむ、投ぐ、載すの動詞を検せよ。

止

まみむめも

るれ

投

がぎぐげご

るれ

載

さしすせそ

るれ

か・く・の・如・く・ウ・エ・二・段・に・活・用・す・る・動・詞・を・下・二・段・活・用・の・動・詞・と・い・ふ。

〔注意〕一、地方によつては、イとエとの發音を混同し、隨つて此の二種の活用を誤ることが多い。

〔注意〕二、或地方を除く外、口語ではウ段に活用しない。

〔善〕 以上述べた所を概括すれば、五十音の行の二段にわたつて活用するものに二種ある。

- (一) 上二段活用(イ、ウの二段に活用する)五十音の行の二段にわたつて活用する
- (二) 下二段活用(ウ、エの二段に活用する)

練習一三

左の動詞の活用を示せ。

へだつ

備ふ

枯る

圍む

越ゆ

見ゆ

帯ぶ

梳る

閉づ

盡く

知る

飛ぶ

恐る

流す

流る

考ふ

滿つ

分く

其の三 五十音の行の一段にのみ活用

するもの

〔美〕

きざ  
 (着) きるべし  
 きれども  
 けるべし  
 けれども

着る、蹴るの如き動詞は、五十音の他の段に活用するこ  
 とがない。唯る、れを添へた活用形があるのみである。

(着)  
 かきくけこ  
 るれ

(蹴)  
 かきくけこ  
 るれ

〔毛〕 着るはイ段にる、れを添へ、蹴るはエ段にる、れを添へたのである。前者を上一段活用の動詞といひ、後者を下一段活用の動詞といふ。

〔美〕

上一段活用に屬する動詞は着るの外、  
 射る 鑄る 煮る 似る 干る 見る 惟みる  
 鑑みる 居る 率ゐる  
 だけである。  
 イニヒミヤ

〔美〕

下一段活用の動詞は蹴るの一語だけである。  
 其の四 五十音の行の三段にわたつて  
 活用するもの

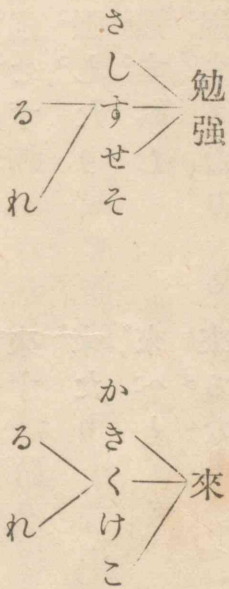
〔六〕

勉強せず  
 勉強したり  
 勉強すべし  
 勉強するなり  
 勉強すれども

來ず  
 來たり  
 來べし  
 來るなり  
 來れども

せもすもいれ  
 名詞を動詞にする

之を表で示せば、



右の二つが五十音の行の三段にわたつて活用するのはよく似てゐる。けれども、上のはイ、ウ、エの三段、下のはイ、ウ、オの三段に活用するのである。ウの段に、れを添へることは上二段下二段の語に似て、どれも五つの活用形をもつてゐる。

上のをサ行變格活用、下のをカ行變格活用といふ。

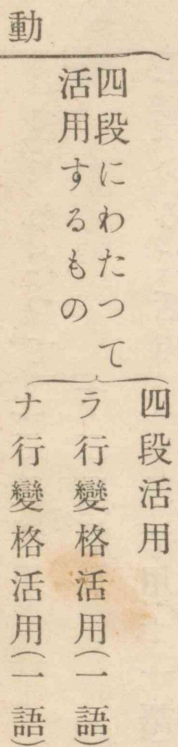
〔六〕サ行變格活用の動詞は元來す(爲)の一語だけである。

但し「罪す」「ゆあみす」「詳にす」「明にす」「辱くす」のやうに、他の品詞から動詞を作る時は皆この活用による。又漢語や外國語が國語の動詞となるにも、皆この活用によるから、今日では中々大切な活用である。

カ行變格活用は(來)の一語だけである。

〔注意〕口語の來る、爲ると比較してよく差別を知るがよい。

〔七〕是に於て、動詞の活用には九つの種類のあることを知つた。



詞

二段にわたつて活用するもの	上二段活用
一段のみに活用するもの	下二段活用
一段のみに活用するもの	上一段活用(十一語)
一段のみに活用するもの	下一段活用(一語)
三段にわたつて活用するもの	サ行變格活用(漢語と他の品詞から動詞となるものを除けば一語)
三段にわたつて活用するもの	カ行變格活用(一語)

練習一四

附線を施した動詞の活用の種類を擧げよ。

- 一 學年は毎年四月に始りて、翌年三月に終る。
- 二 金剛石も磨かすば玉の光は添はざらん。
- 三 日の暮るゝより雪降り出でて積ること七八寸に及びぬ。
- 四 心こゝにあらざれば聴けども聞えず、視れども見えず、食へども其の味を知らず。

- 五 子等は皆軍のにはに出で果て、翁や一人山田もるらん。
- 六 或人弓射ることを習ふにも、る矢をたばさみて的に向ふ。師のいふ、初心の人二つの矢を持つこと勿れ。あとの矢を頼みて、はじめの矢になほざりの心あり。唯この一矢に定むべしと思へといふ。

第十三章 形容詞の活用

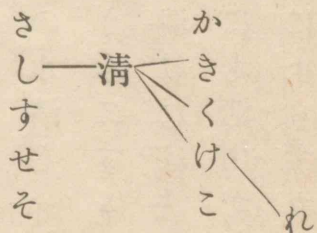
〔三〕 水清く流る

川の水清し

清き水にすゝぐ

水清ければ洗ふ

形容詞にも活用がある。其の活用は動詞のやうに、五十音の一行に止らず、カ行とサ行とにまたがつてゐる。



〔查〕 形容詞には右に示すやうに、く、し、き、げれの四つの活用形がある。赤し、白し、長し、短し、重し、輕し等の語を活用させれば皆同様である。

- |       |     |     |     |     |     |
|-------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 1 赤く  | 白く  | 長く  | 短く  | 重く  | 軽く  |
| 2 赤し  | 白し  | 長し  | 短し  | 重し  | 輕し  |
| 3 赤き  | 白き  | 長き  | 短き  | 重き  | 輕き  |
| 4 赤けれ | 白けれ | 長けれ | 短けれ | 重けれ | 輕けれ |

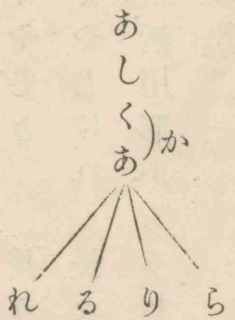
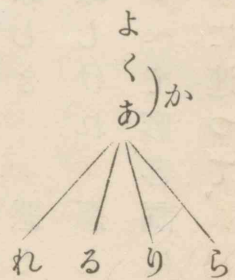
〔查〕 く、き、げれとカ行の活用をする時、上にしの音を有つてし、く、し、き、げれとなる形容詞がある。かういふ場合には(2)のしの活用にはしを重ねないのである。涼し、悪し、く、やし、長々しなどが其の例である。

- |        |      |       |       |
|--------|------|-------|-------|
| 1 涼しく  | 悪しく  | くやしく  | 長々しく  |
| 2 涼し   | 悪し   | くやし   | 長々し   |
| 3 涼しき  | 悪しき  | くやしき  | 長々しき  |
| 4 涼しけれ | 悪しけれ | くやしけれ | 長々しけれ |

〔查〕 すべて形容詞は(1)の「く」の活用形からう行變格の動詞ありに連つて、

- |   |      |      |      |      |
|---|------|------|------|------|
| 善 | よから  | よかり  | よかる  | よかれ  |
| 悪 | あしから | あしかり | あしかる | あしかれ |

の如く活用する。その活用形は全くラ行變格と同様である。



かく活用した形容詞を形容動詞といふ。

〔老〕「詳に」「立派に」「鮮麗に」「滔々」などは、に、とからありに連つて詳なり、立派なり、鮮麗たり、滔々たりのやうな形容動詞をつくる。

〔注意〕「正成は忠臣なり」「父父たりのやうに名詞からなり、たりの助詞につづく場合と混同してはならぬ。

練習一五

左の形容詞を活用せしめよ。

- 正し 恐し 久し いやし
- 淡し 貴し 甘し 辛し
- 太し 冷たし 重々し 辱し

練習一六

左の形容詞から形容動詞を作れ。

- 高し 凛然と

練習一七

左の文から形容動詞を見出せ。

- 一 東岸西岸の柳遅速同じからず、南枝北枝の梅開落已に異なり。
- 二 健全なる精神は健全なる身體に宿る。

- 三 寒からず暑からず、今は最好の時節。
- 四 人の體温は三十七度内外なれば、大方それより高かるべからず、低かるべからず。
- 五 草の葉がぐれに黄なる花、白き花咲きて、こほろぎの音も、いとあはれなり。
- 六 金殿玉樓にも楽しからぬ折はあるべく、茅店草屋にも楽しき處はあるべし。

### 第十四章 動詞の活用形

其の一 終止形と連體形

- 〔六〕 (四) 書を讀む。 讀む人
- (ラ變) 人あり。 あり人
- (ナ變) 犬死ぬ。 死ぬる犬

- (上二) 柿落つ。 落つる柿
- (下二) 火燃ゆ。 燃ゆる火
- (上一) 花を見る。 見る人
- (下一) まりを蹴る。 蹴る人
- (サ變) お花勉強す。 勉強するお花
- (カ變) 客來(ク)。 來る客

上のは物を言切る活用形で終止形といひ、下のは名詞、代名詞即ち體言に連る活用形で連體形といふ。

〔六〕 前項を見てもわかるやうに、四段、上一段、下一段の動詞は終止形と連體形とその形が同じである。しかし、その他は皆違つてゐる。然るに口語では、大抵この區別がなくなつたのである。

〔注意〕言切る形を終止形につづく形を連體形と記憶せよ。にばかりでなく、大抵の助詞には連體形からつづくものである。

練習一八

動詞の活用形に誤があるなら正せ。

- 一 才智なき時は身を立つこと能はず。
- 二 疫病流行して死ぬもの多し。
- 三 品物に手を觸ることを禁ず。
- 四 妻戀ふ鹿の鳴く音あはれなり。
- 五 流る涙瀧の如し。
- 六 大は小を兼ねる。

其の二 未然形と已然形

〔ぎ〕 (四) 花咲かば告げん 花咲けば告ぐ

(ラ) 變人あらば答へん	人あれば答ふ
(ナ) 變死なば悲しまん	死ぬれば悲しむ
(上) 柿落ちば拾はん	柿落つれば拾ふ
(下) 火燃えば消さん	火燃ゆれば消す
(上) 花を見れば嬉しからん	花を見ればうれし
(下) まりを蹴れば疲れん	まりを蹴れば疲る
(サ) 變勉強せば勝たん	勉強すれば勝つ
(カ) 變來(コ)ば逢はん	來(ク)れば逢ふ

上のは未だ起らない事件をあらかじめいふもの、下のは已に起つた事件を定めていふもので、上のを未然形、下のを已然形といふ。例へば未然形の「花咲かば」は口語では「花が咲いたら」「花が咲くなら」などの義、已然形の「花咲けば」は文語



も口語も同じである。

〔七〕口語では未然形、已然形の區別が微弱になつて、已然形を未然形にも用ひる。

〔注意〕んにつづく形を未然形、どもにつづく形を已然形と記憶すればよい。

練習一九

動詞の活用形に誤があるなら正せ。

- 一 風吹けば浪立たん。
- 二 磨けば光らん。
- 三 聴かば面白し。
- 四 人をのろへば穴二つ。
- 五 君行かば我もゆく。

其の三 連用形

〔七〕(四) 咲き始む

(ラ) 變世にあり難し

(ナ) 變死に損ふ

(上二) 落ち込む

(下二) 燃え上る

(上二) 見終る

(下二) 蹴飛ばす

(サ) 變勉強し盡す

(カ) 變來にくし

花咲き、鳥歌ふ

鳥あり、未だ鳴かず

馬死に、人助かる

水落ち、石出づ

火燃え、灰残る

花を見、歌をよむ

まりを蹴、弓を射る

今日勉強し、明日勉強す

昨日は來、今日は來ず

上段の例を見よ。すべて用言(動詞、形容詞)につづく活用形である。故に連用形といふ。連用形は文の半途で中止する形にも用ひる。下の段の例はそれである。

ぬん

〔注意〕 他の動詞、形容詞につづく形を連用形と記憶すればよい。

其の四 命令形

- 〔善〕 (四) 咲。け。花。よ。
- (ラ) 變 我。に。幸。あ。れ。
- (ナ) 變 早。く。死。ね。
- (上) 二 落。ち。よ。
- (下) 二 燃。え。よ。
- (上) 一 あ。れ。を。見。よ。
- (下) 一 ま。り。を。蹴。よ。
- (サ) 變 よ。く。勉。強。せ。よ。
- (カ) 變 明。日。來。よ。

これはすべて命令する形であるから命令形といふ。四段、ラ變、ナ變の外は皆よの助詞を附けて始めて命令形になるのである。

第十五章 形容詞の活用形

〔善〕 水。清。し。 清。き。水。

上のは終止形、下のは連體形である。 水。清。く。ば。洗。は。ん。 水。清。け。れ。ば。洗。ふ。 明。日。來。よ。く。勉。強。せ。よ。

上のは未然形、下のは已然形である。 〔注意〕 ともにつづく形を未然形、ともにつづく形を已然形と記憶すればよろしい。

〔美〕 水。清。く。澄。め。り。 水。清。く。草。青。し。

連用形である。中止にも用ひることは動詞と同じである。 〔老〕 水。清。か。り。終。止。 清。か。る。水。連。體。 清。か。ら。ば。洗。は。ん。未。然。 清。か。れ。ど。も。洗。は。ず。已。然。

動	形
人。用。を。ツ。ク。	
2. 中。止。	

1. 活用形  
2. 中止

清<sup>○</sup>かり<sup>○</sup>けり<sup>○</sup>(連用)

清<sup>○</sup>かれ<sup>○</sup>(命令)

形容動詞にも亦活用形がある。(〔突〕参照)

〔注意〕 命令形は形容動詞にはかりある。

### 第十六章 助動詞の活用

〔支〕 助動詞の中には下二段活用に等しい活用をなすものもあり、ラ行變格に等しい活用をなすものもあり、形容詞のやうな活用をなすものもある。(附録の表について見よ) 殊に左の二語に注意せよ。

(き) 雨降り<sup>○</sup>き<sup>○</sup>(終止) 昨日降りし<sup>○</sup>雨(連體)  
雨の降り<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>ば<sup>○</sup>(未然) 雨降りし<sup>○</sup>か<sup>○</sup>ども<sup>○</sup>(已然)

おしてつる  
こり  
まきけり

行きたり  
りきけり  
りきたり  
(連用)

(ず) 雨降らず<sup>○</sup>(終止) 永く降らぬ<sup>○</sup>雨(連體)  
雨降らず<sup>○</sup>ば<sup>○</sup>(未然) 雨降らぬ<sup>○</sup>ば<sup>○</sup>(已然)

### 第十七章 用言と助動詞との連結

其の一 時のあらはし方

〔支〕 1 雨降る<sup>○</sup>(現在)

2 雨降りたり<sup>○</sup>(現在完了)

3 雨降りき<sup>○</sup>(過去)

4 雨降らん<sup>○</sup>(未來)

5 雨降りたり<sup>○</sup>き<sup>○</sup>(過去完了)

6 雨降りたらん<sup>○</sup>(未來完了)

(1)は動作の時間をいふ必要のない場合、又は現在の時を示

注意

口語には2、3とも  
に降つたとい  
ひ、4は降らうと  
いふ。5、6とも  
にその用法が亡  
びた。

す場合に用ひる。これには一つの助動詞も取らない。(2)は動作の今正に終つたことを示す。(3)は動作の過去に終つたことを示す。(4)は動作の未來に起るべきことを示す。(5)は過去の或時に動作の已に終つたことを示す。(6)は未來の或時に動作の終つてあるべきことを示す。

〔六〕 降りぬ。降りりといふ時のぬ。りは現在完了の時をあらはす助動詞で、略たりに同じである。

〔七〕 降りけり。のけりは過去の時をあらはす助動詞で、略きに同じである。

其の二 推量、義務等のあらはし方

〔八〕 前課では時の言ひあらはし方を學んだ。それは唯動作をありのまゝに述べて、動作の時間を明らかにしたの

である。「讀むだらう」「讀む筈だ」のやうな推量、義務等

あらはすには別の助動詞と連結しなければならぬ。

〔九〕 べし。の助動詞は種々の意義を附加する。

1 讀むべし。 讀むだらう 推量

2 讀むべし。 讀むはずだ 義務

3 讀むべし。 讀むことが出来る 能力

4 讀むべし。 讀め 命令

〔注意〕 (一) 推量にはなるべし。を用ひることがある。

(二) 命令は動詞の活用形でも言ひあらはすことが出来るが、〔七〕参照助動詞を付けても言ひあらは

すことが出来る。

(三) らんも推量をあらはす助動詞である。

其三 打消のあらはし方

〔八〕 第十五章、第十六章に學んだ所は、いづれも動詞を肯定にいふ場合である。否定即ち打消を示すにはず。又はざりの助動詞を用ひる。

讀む 肯定

讀まず 否定

讀まざり 否定

其の四 使役、受身等のあらはし方

〔九〕 時のあらはし方以下三課に學んだ所は動作をする方に就いての種々の用法である。然るに、「人にうたる」といへば、動作を被る(受身)こととなり、「人にうたしむ」といへば、人を動作せしむる(使役)こととなる。

1 (通常) 打つ

自ら打つ

2 (受身) 打たる

人に打たれる

3 (使役) うたす

人に打たせる

4 (使役) 使役のうたせらる

人に打たせられる

〔注意〕 受身の形は亦能力の法を示すにも用ひる。「打てば打たる」といふ時の「打たる」は「打つ」ことが出来る「の意」である。

其の五 敬語のあらはし方

〔六〕 見らる (受身)  
見さす (使役)

見させらる (使役の受身)

右はいづれも敬語としても用ひる。

〔五〕 見給ふ 見侍り

聞き給ふ 聞き侍り

給ふ。侍りなども元來は動詞であるが、敬語の助動詞として用ひる。但し同じ敬語の中でも、先方を敬つて言ふ場合と、自ら謙つていふ場合との區別があることを知らなければならぬ。

〔六〕「おはします」「見そなはす」「知ろしめすなどは初から敬語だけに用ひる動詞である。これ等は助動詞の助をかりる要がない。

〔注意〕 名詞にも形容詞にも副詞にもおほみ、おん、御

等を附加へて敬語を作ることが多い。代名詞にも特殊の敬稱が尠くない。これは我が國語の一つの特質である。

其の六 其他の助動詞

〔七〕 なるの助動詞は勢を強め、又は指定する意味をもつてあるものである。

讀む なり

讀み たる なり

讀ま ざる なり

讀ま せ ざら ざる べき なり

〔八〕 正成は忠臣なり

三つと二つとの和は五つなり。  
舜も人なり。我も人なり。

この助動詞は右の如く體言の下にもつゞくものである。

〔五〕 父父たらざれども子子たり。

これは何たることぞ

このたりは體言にだけ續いて、用言にはつゞかない。けれども便宜上助動詞として取扱ふのである。

〔五〕 花の如し。

天女を見るが如し

如しはの、がの助詞の下にもつゞく。けれども便宜上助動詞として取扱ふのである。

〔五〕 前の〔五〕の例でもわかるやうに、助動詞は二つでも、三つ

でも必要に応じて重ねて用ひられる。

讀ま しむ。

讀ま たり。

讀ま たり なり。

左の例のは最も多く連つた場合である。

使役 受身 敬語 打消 時 推量

讀ま しめ られ 給は ざり し なるべし

〔五〕 遠くは行かじ。

聞きても分るまじ。

何かと思ひけん。

まじは推量と打消とを兼ねた助動詞、けんは推量と過去とを兼ねた助動詞である。

練習二〇

書く<sup>〇</sup>の動詞に、左の助動詞を種々に連結せよ。

- る(受身)      ざり(打消)      けん(過去推量)
- けり(時)      給ふ(敬語)

練習二一

左の附圈した箇處の意義と助動詞の用法とを説明せよ。

- 一 百事今日の如く完備せざりき。
- 二 始は九州よりや傳はりけん
- 三 愛國婦人會の組織は明治三十四年を以て成れり。
- 四 三十六年三月閑院宮妃殿下總裁とならせ給ひ會務益揚れり。
- 五 君が代の奏樂の中に正殿に臨ませられ、ついで玉座につかせ給ふ。

- 六 空には雲の往來あわたしく、あられも降りくべき景色なり。
- 七 折ふし益すぎにて、瓜茄子の類夥しく海岸に流れよたり、瑞軒ふと思ひつき、その邊の乞食どもを雇ひて之を取上げさせ、鹽漬にして、普請小屋に持ち行きしに、大勢の日雇等争ひて買取りぬ。
- 八 遠山にかゝる白雲は散りにし花のかたみなり、青葉に見ゆる梢には春の名残ぞをしまるゝ。
- 九 世の文明に伴なふべき知識技能を備へんことを計らざるべからず。



女子新文典 上卷終

動詞活用形一覽(第十四章參照)

變力	變サ	一下	一上	二下	二上	變ナ	變ラ	四	動 詞 活 用 形
來	爲	蹴	着	受	起	死	有	書	終止
く	す	ける	きる	受く	起く	死ぬ	有り	書く	連體
くる	する	ける	きる	受くる	起くる	死ぬる	有る	書く	
こ	せ	け	き	受け	起き	死な	有ら	書か	未然
くれ	すれ	けれ	きれ	受くれ	起くれ	死ぬれ	有れ	書け	已然
き	し	け	き	受け	起き	死に	有り	書き	連用
こ	せ	け	き	受け	起き	死ね	有れ	書け	命令
よ									

(注意) 本表は終止と連體とを對照し、未然と已然とを對照するのを主眼としてある。之を縦に暗記せしめる趣旨ではない。第十四章注意に説いたやうに教授せられたい。以下の二表も同様。



				形容詞に似たる活用		活用に等しき		ラ行變格に等しき		用き活		段に等しき		下二段	
ず	き	けん	らん	如し	まじ	べし	めり	べかり	り	たり	なり	しむ	さす	らす	助動詞活用形
ず	き	けん	らん	如し	まじ	べし	めり	べかり	り	たり	なり	しむ	さす	らす	終止
ぬ	し	けん	らん	如き	まじき	べき	める	べかる	る	たる	なる	しむる	さする	らする	連體
ず	せ			如く	まじく	べく		べから	(ら)	たら	なら	しめ	させ	られ	未然
ね	しか	けめ	らめ		まじけれ	べけれ	めれ	べかれ	れ	たれ	なれ	しむれ	さすれ	らすれ	已然
ず				如く	まじく	べく	めり	べかり	(り)	たり	なり	しめ	させ	られ	連用
										たれ	なれ	しめ	させ	られ	命令
													よ		

主要助動詞活用形一覽(第十六章參照)

				形容詞活用形	
鮮明たり	善かり	悪し	善し	終止	連體
鮮明たり	善かり	悪し	善し	連體	
鮮明たる	善かる	悪しき	善き		
鮮明たら	善かれ	悪しく	善く	未然	已然
鮮明たれ	善かれ	悪しけれ	善けれ		
鮮明たり	善かり	悪しく	善く	連用	
鮮明たれ	善かれ				命令

形容詞及び形容動詞活用形一覽(第十五章參照)

善	悪	鮮明	終止	連體	未然	已然	連用	命令
善し	悪し	鮮明たり	終止	連體	未然	已然	連用	命令
善き	悪しき	鮮明たる						
善く	悪しく	鮮明たら			未然	已然		
善けれ	悪しけれ	鮮明たれ						
善く	悪しく	鮮明たり			連用			
善かれ		鮮明たれ						命令



動詞活用の對照表

變カ	變サ	一下	一上	二下	二上	變ナ	變ラ	段四	文語の活用
こ き く くる くれ	せ し す する すれ	け  ける  けれ	き  きる  きれ	け く くる くれ	き く くる くれ	な に ぬ ね ぬる ぬれ	ら り る れ	か き く け	書
來	爲	蹴	着	受	起	死	有	書	
變カ	變サ	一下	一上	一下	一上	段四	段四	段四	口語の活用
こ き くる くれ	せ し する すれ	け  ける  けれ	き  きる  きれ	け ける けれ	き きる きれ	な に ぬ ね	ら り る れ	か き く け	書
來	爲	蹴	着	受	起	死	有	書	

大正十一年十月五日印  
 大正十一年十月十日發  
 大正十二年一月九日訂正再版印刷  
 大正十二年一月十三日訂正再版發行



著者

東京市小石川區竹早町三十二番地

發行者

東京市牛込區白銀町廿九番地

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十八番地

女子新文典 全貳冊

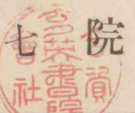
定價 上卷 金貳拾壹錢  
 下卷 金貳拾壹錢  
 大正高年度 上卷 金參拾八錢  
 臨時定價 下卷 金參拾八錢

芳賀矢一

合資會社 育英書院

目黑甚

白井赫太郎



印刷所 興社

發行所  
 發賣所

東京市牛込區白銀町廿九番地  
 振替口座(東京)七四二二番  
 東京市京橋區南傳馬町二丁目  
 振替口座(東京)二八〇九番

合資會社 育英書院  
 目黑書店



竹葉集

藤原  
公家





